

無量壽

平成17年8月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語⑥

第八号までに紹介したように、親鸞聖人は関東に二十年あまり住んでおられました。その間に浄土真宗の根本聖典『**教行信証**』を書かれたり、多くのお弟子を育てたりなさいました。しかし六十二、三才のころ、家族をつれて京都へ帰られました。その理由は

①『**教行信証**』に手を加え完成させるため。
②関東の弟子が聖人を師と仰ぐ事が行きすぎるとになり、それを嫌われたため。



親鸞聖人御帰京
(谷川 岱陽 画)

③京都の法然上人の墓が荒らされたり、京都に残って指導していた法然上人の弟子がまた流罪になるなど、京都での念仏の教えが失われていくことを見捨てておけなかったため。などいくつかのことが考えられます。

聖人はあくまで法然上人を師と仰ぎ、「真の宗教である浄土宗の教え」を継承しさらに高めて行くことに力を注いでおられました。したがって自らが宗派を立てるといふ意志は持つておられませんでした。その聖人にとって②は困った状況でしたし、③はどうてい見過ごしておくことのできない大きな問題でした。

しかし京都では鎌倉幕府によって再び念仏禁止令が出され、聖人は表立っての活動をする事ができませんでした。それどころか住まいさえも転々と変えなければならぬ状況だったようです。

そのような生活の中で、聖人はひたすら著述に励まれました。七十六歳のときに、『**浄土和讃**』と『**高僧和讃**』とを書かれました。その十年後には『**正像末和讃**』を書いておられます。以上

の三本を三帖和讃と呼んでいます。『**正信偈**』を拝読した後に念仏と共に称えるのがこの和讃です。普段は数多くの和讃の中で『浄土和讃』の最初の六首のみを称えています。が、**山の御朝事では全ての和讃を六首ずつ順番に称えます。**ですから毎朝称える和讃が違っているのです。

ちなみに『**正信偈**』は聖人がお作りになった偈(詩)で、『**教行信証**』の中に載っています。

続く



林徳寺団体参拝での本山御朝事
(平成16年11月18日)

浄土真宗の作法・心得（シリーズ4）

御本尊

浄土真宗の御本尊は、「阿弥陀如来一

仏」と定められています。この御本尊には、御絵像または御木造をもって仏徳を示した**形像本尊**と、名号を持って仏徳を表した**名号本尊**とがあります。また名号本尊には、**六字名号**（南無阿弥陀仏）、**十**
字名号（きみょうじんじつぼうむげこう 帰命尽十方無碍光如来）、**九字名**
号（ふかしぎこう 南無不可思議光如来）の三種類があります。

いずれの御本尊も、本山からお迎えしたものは、その裏に**ご門主様の署名と押印**がされています。これを「御裏書き」とも言います。

お仏壇にはこの御裏書きのある本物の御本尊を安置したいものです。そのためにも、御本尊は本山・京都西本願寺からお迎えしましょう。

親鸞聖人（宗祖・祖師）



・中央のご本尊に向かって右へご安置

右

十字名号
（きみょうじんじつぼうむげこう 帰命尽十方無碍光如来）



ご絵像（ご本尊）



・ご本尊は仏壇の中央にご安置

中央

六字名号
（なんむあみだぶつ 南無阿弥陀仏）



蓮如上人（蓮師）



・中央のご本尊に向かって左へご安置

左

九字名号
（なんむふかしぎこう 南無不可思議光如来）



御本尊をお仏壇に安置する際は、右の写真のように三幅の掛け軸を、中央とその左右にお掛けします。

絵像の場合は、御本尊の左右に親鸞聖人と八代目蓮如上人の絵像をお掛けするのが習わしとなっています。

連研参加者募集中

平成18年からの連続研修会に参加してくださる方を募集しています。
詳細は住職にお問い合わせ下さい。